時事新報

第千三百五號

明治十九年六月十八日 金曜日
舊丙戌五月十七日（己酉）
日出午前四時四十五分
日入午後七時十七分
月出午後八時二十九分
月入午前六時零六分
滿潮午前六時三十九分
滿潮午後六時五十八分
（西暦一千八百八十六年）

時事新報定價

一枚金三錢〇一箇月前金六十五錢〇三箇月前金一圓八十錢〇六箇月前金三圓四十錢〇一箇年前金六圓五十錢〇郵便税一箇月金廿六錢〇一箇年金三圓十二錢〇左ニ掲クル各地ニ於テハ該地賣捌所ヨリ配達スルニ付郵便税無料ニテ配達致候（但本社ヨリ直接郵送スルモノハ此限ニアラズ）

●東京●横濱、横須賀●神奈川、藤澤、大磯、小田原、函根七湯、韮山、修善寺、三島、沼津、原、吉原、興津、清水、靜岡、濱松、島田、藤枝●大坂、京都、大津、和歌山●神戸、岡山、笠岡、尾ノ道、福山、廣島、德島、高知、下ノ關、長崎●名古屋、岐阜、岡崎、豐橋、四日市、桑名、津、松坂、山田●仙臺、福島、二本松、白石、石ノ卷、函館、青森、弘前●高崎、小諸、岩村田、上田●宇都宮、鹿沼、八王子、千住、越ヶ谷、粕壁、杉戸、幸手、加須、栗橋●千葉、佐倉、東金、八幡、船橋、市川

其他同地近傍配達便宜ノ個所ハ同シク配達料不申受候

時事新報廣告料（前金）一行ニ付

一行廿四字詰	一日限	二日以上六日迄	七日以上十五日迄	十六日以上
自一行至十行	十錢	八錢	七錢二厘	六錢八厘
自十一行至三十行	九錢	七錢	六錢三厘	五錢九厘五毛
三十一行以上	八錢	六錢五厘	五錢八厘五毛	五錢五厘

時事新報

コレラ

人間世界の所謂害惡なるものは渾體皆害惡といふにはあらずして害を含むこと多くして利を含むこと少なきものゝ即ちこれを害惡と稱するものゝ如し然るに彼の惡疫の如きは此例にあらずして渾體皆害惡ならざるはなく惡疫流行の爲めに我人間世界は何等の利益をも得ること能はずして唯其害を蒙るのみなり日本國民は何等の不幸にや數年以來年としてコレラの襲撃に遇はざるはなく爲めに人命財産を徒費する其弊害勝げて云ふべからず本年の如きも陽春の時節櫻花初めて枝を辭するの候よりして早くも京都大坂の地方にコレラ漸く流行の兆あり其病症の劇烈なる一たびこれに罹るものは十中に七八必ず黄泉の人となるを免るゝこと能はず斯くて漸く近畿の諸縣に蔓延し今日に至りては京都大坂は勿論之に接近する兵庫、岡山、廣島、和歌山、愛媛等の諸縣も亦皆コレラ病流行の地と定めらるゝに至りたり日本全國頻年コレラ流行の災難に懲り本年の如き京坂地方該病流行の兆ありと聞くと齊しく各地方の當局者は大に豫防の手當に力を盡し到る處として撿疫避病の事に奔走せざるはなし殊に東京の如き百萬の人の集まる所別して豫防の必要を感ずるは無論の事にして人々の配慮盡力一方ならざるなり然れども果して豫防の効を奏して遂に本年該病の流行を東京地方に見ずして止むことを得るや否や甚だ掛念に堪へざるなり蓋し數年以來全國の諸業不景氣の爲めに人民衣食を給すること能はず幸にして凍死餓死せざるも惡衣惡食して纔かに一日の露命を維持する者全國を通して幾十萬なるを知るべからず此等の窮民は必ずしもコレラの手を假るを待たず一朝の雨一夕の風其生命を絶つに十分なる折柄忽ち劇烈なる惡疫の襲來に遇ふ一齊に首を授けて免かれ遁ることを得ざるも事情決して無理ならざるなり左ればにや本年のコレラも京都大阪等窮民輻湊の都會に先づ其根據を占め退て蜂の巣を覆へしたるが如く一時に其毒を近縣に吹散らし氣候の暑熱を加ふると共に日に其勢威を増し向ふ所敵なき有樣なり六月の中旬にして既に斯の如し是れより漸く七八月の炎暑に際せば遂に滔天の勢を成すやも知るべからざるなり從來東京は窮民の最も多き所人口稠密なる市都の如き平日の衛生法最も不完全にして用水惡水汚穢物の始末等實以て言語道斷なるものあり尋常の年にてもコレラの特發を免かれざる有樣なるに今年は去年該病流行の翌年と云ひ頻年不景氣の後と云ひ又大阪地方流行の甚だしき折柄と云ひ尋常人力を以て果して能く東京市中にコレラの侵入を防禦し得べきや如何極めて難問たるに相違なきなり若し不幸にして一旦此東京をコレラ流行の修羅場に變ずることもあらんには其病毒を四方に傳ふること速かなる固より京都大坂の比にあらず必ずや水の堤を決し火の野を燎くの勢ならん既に斯る見込のありとすれば豫防法撿疫法等の果して實際に奏功の有無を爭ふに及ばず唯先づ人事を盡して天命を待つと覺悟を定め必死の力を防禦に盡して必ずしも成敗如何を問はざるの外に工風なからん斯の如く覺悟を定めて嚴に豫防法を施行するに於ては市民必ず其煩に堪へずして苦情百端なるべきや疑を容れず多數の中には或はこれが爲めに容易ならぬ迷惑を蒙る者も出來るに相違なかるまじといへども社會一般の幸福の爲めにはこれも亦顧るに遑あらず豫防の寛に失して悔を後日に遺さんより寧ろ嚴に失して今日の安心を求むるに如かざるべし物先づ腐敗して蟲これに生ず日本人民頻年先づ惡衣惡食してコレラ來る我輩は今年の病勢の極めて劇烈ならんことを恐れて止まずといへども最早此場に臨みて過去の事を語るの餘閑なし唯力の及ぶ所を盡して成る丈け害惡を輕くすることを勉めんのみ

官報

●虎列剌

流行地	月日	新患者	新舊死亡
岡山縣	六月十四日	二十四人	六人
愛媛縣	同	三十人	二十五人
大坂府	六月十五日	八十三人	百〇八人
但シ四區西成郡ニ新患三十二人新舊死亡六十八人			
京都府	同	十七人	二十一人
但シ上下兩京區ニ新患六人新舊死亡七十二人			
和歌山縣	同	十四人	十八人

○流行地外虎列剌　神奈川縣より昨十六日電報に横濱元町に特發虎列剌患者一人、靜岡縣に於て曩に發生せる虎列剌患者は特發なり、山梨縣去る十二日十三日新患各一人、愛知縣去る十二日十三日新患四人、新舊死亡三人なり（神奈川外三縣報告）（本年六月十七日官報）

雜報

○音樂科　訓盲啞院にては音樂科を置て琴、胡弓を敎へ居しが今度音樂取調所より敎員を聘しピヤノー等をも稽古せしむる事になしたりと

○支那の外國貿易　清國總税務署刊行の貿易年報に據れば昨年（西暦千八百八十五年）中同國外國貿易の總價額は一億五千三百二十萬五千七百二十九兩にして之を一昨年の貿易高一億三千九百六十萬八千四百三十八兩に比すれば差引千三百二十九萬七千二百九十一兩を増加せり右の中輸入價額は一昨年に比して一千五百五十萬兩を増し輸出の價額は却て二百萬兩を減ぜり今若し香港までを輸入したる阿片をも支那の輸出價額中に算入せば輸入總額は七千三百七十九萬一千三百六十三兩となり輸出總額に超過すると凡一千四百五十萬兩なり尤も陸路より露國に輸出せる支那茶の價額百六十一萬六千七百兩と其他香港より直接に輸出する貨物の價は右の輸出總額中には加はらざるものなり又同國の輸出品中最も重要なる茶及び生糸類の二種を擧ぐれば昨年中茶の輸出高は二百十二萬八千七百五十担（百六十匁一斤にて百斤）にて其價は凡三千二百萬兩即平均一担の價十五兩、二に當り又生糸類の輸出高五萬担にして其價一千二百八十四萬六千七十四兩即ち平均一担の價二百五十二兩、五に當り之を一昨年の平均相場に比すれば一担に七兩半の減價なり又昨年中海關税の收入高は輸出入税、沿岸貿易税、噸税、經過税、等を合せて一千四百四十七萬二千七百六十六兩にして一昨年中の總收入一千三百五十一萬七百十二兩に比すれば九十六萬二千四十五兩の増加ありと云ふ（上海メルキユリー）

○朝鮮日誌　第十　井上角五郎

四月三日仁川港を發す是より先き余京城に在りて北堂病死の家信に接し即ち國王殿下に奏請して數十日間の賜暇を得、匆々歸朝の途に上り十一日を以て鄕里㟁山に着し北堂の喪を服し家に居ること殆んど三旬、五月三日鄕里を發して東京に赴き茲に留まること數日、十二日東京を發し十六日長崎に着す同行に朴準禹氏あり氏は朝鮮外衙主事にして今回政府の命を奉じて日本に留學せる朝鮮生徒一同を召回を爲めに渡航せしなり氏と歸を共にする生徒都合八人も亦同行なれば船中既に朝鮮に在るの想ひなり

五月二十三日船長崎を發す同船に山田季次、上村富一の兩氏あり共に余が舊知なるを以て更に同行の加はるを覺へたり兩氏は長崎に在りて日本郵船會社の事務に從事し今回は社用を帶びて仁川、芝罘、天津の航務を巡視するなりといふ二十五日仁川に着し翌日京城に入り前の如く博文局に出入して同局の事務を幹せり六月二日肥後丸仁川に入港日本の郵便を齎らせり

○京城通信　六月二日朝鮮京城發

去る四五月來朝鮮の國情は依然として其觀を改めず至つて一の運動なしと云ふも可なるが如し唯其間に起りたる出來事にして少しく人の耳目に係るべしと思ふものは下に報ずる所の第一佛韓條約の成りし事、第二米國人デニー氏の朝鮮政府に雇はれし事、第三政治社會に小軋轢を生じたる事、第四米價の下落したる事等なるべしと思はる

佛國公使コゴルダン氏は本國の命を奉じて朝鮮政府に條約を取結ぶ爲め軍艦三艘を率ゐて仁川に來着し直に京城に入りしが兵士八十名を以て護衛に備へたり朝鮮人は昔時より屢々佛人に苦められたる例なるを以て氏の入京を聞て城内の人心頗る穩かならず然るに氏が外衙門と談判を開くに及び朝鮮國内に天主教會を設くる事を申出でたりと聞き更に一層の驚駭を與へたるが朝鮮政府にては金晩植を以て全權大臣となし氏と談判を開き五月廿六日を以て談判終結し條約全く成りしが其條目は悉く朝鮮人より申出したる通りにて英韓條約と同く天主教會堂を國内に設くる箇條の如きは無論除き去れりその後貿易章程につき數回の談判あり終に玻瓈の器物香類の製品凡そ十品程は英國章程よりも關税を低くなし愈々本日（六月二日）に至て議定し明日は右の假條約に調印し同氏は來る五日に京城を出立し南陽よ

り同國軍艦ふ
米國人デニー
津に赴き五月
惡ともふ評判
如し
五月三日に別
の三人流罪に
せらる其罪は
れふ又五月十
安宗洙、安寧洙
りと云ふの故
は追々同罪の
何が故に今日
竟は政治社會
けて己れ獨り
に上疏せまに
又之と同時に
待てり今その
して金氏も亦
明治十七年の
と取片づくる
六十兩、魚氏
その事と國王
自ら城外に引
當時默許せし
るべしといふ
て署理督辦と
閔應植と閔泳
なり閔泳韶と
政府の有力者
泳韶なりとい
なりたるが如
る由なり
去る五月二十
生五人い一時
されたり曾て
あり
米價は是迄朝
月間に二兩三
と漢江の氷解
が爲め京城内
あり

○岡山通信

當縣にては虎
あるよとなる
要所なるが故
を以て乘客い
來る旅人の内
らざる趣なり
務次官は柳谷
に到着直に本
行等を巡視し
後樂園内觀
坂岡山縣令高
十餘名の出席
堅地等を巡視
歸京の途に就